



Title	重症筋無力症における拡大胸腺摘出術前後の抗アセチルコリン受容体抗体の変動に関する研究
Author(s)	簗谷, 勝己
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35016
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	かご 電	たに 谷	かつ 勝	み 己
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	第	6 9 7 1	号	
学位授与の日付	昭 和 60 年 8 月 2 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	重症筋無力症における拡大胸腺摘出術前後の抗アセチルコリン受容体抗体の変動に関する研究			
論 文 審 査 委 員	(主査)			
	教 授 川 島 康 生			
	(副査)			
	教 授 垂井清一郎	教 授 森	武 貞	

論 文 内 容 の 要 旨

（目 的）

胸腺摘出術は、重症筋無力症に対し有効である。また抗アセチルコリン受容体抗体は、重症筋無力症患者の80～90%において血中に認められ、重症筋無力症の病因とされている。しかしながら、抗アセチルコリン受容体抗体価の胸腺摘出術後の動態ならびに抗体価の変動と術後の臨床像との関連性は不明である。

そこで、重症筋無力症患者の血中抗アセチルコリン受容体抗体価を拡大胸腺摘出術前後に測定し検討することによりこの二点を明確にせんとした。

（方 法）

Osserman の臨床分類の全身型（Ⅱ A と Ⅱ B）重症筋無力症患者59例で術前抗アセチルコリン受容体抗体価を測定した。このうち24例については拡大胸腺摘出術後にも同様の測定を行なった。すなわち全身型重症筋無力症で、術前抗アセチルコリン受容体抗体陽性の患者24例の術前血漿24検体と術後血漿41検体につき抗体価を測定した。

抗アセチルコリン受容体抗体価は、－20℃に凍結保存後に解凍した末梢静脈血漿を検体として、ラットの除神経下腿筋から抽出したアセチルコリン受容体を抗原とした抗ヒトIgG法により測定した。なお正常人26人を対照とした。

拡大胸腺摘出術の効果判定は、Papatestasの規準に従い寛解・著明改善・中等度改善・不変・悪化に分類した。術後の測定を行なった24例の術後追跡期間は平均3年であった。

(結 果)

1. 正常人の抗アセチルコリン受容体抗体価の平均値 + 3 SDは 0.33 nMであり、この値以下を正常値とした。
2. 全身型重症筋無力症患者59例中50例 (85%) で抗アセチルコリン受容体抗体が陽性であった。
3. 拡大胸腺摘出術後における各症例の最新時 (平均 3 年) の抗アセチルコリン受容体抗体価は、21例 (87.5 %) で下降し、3 例 (12.5 %) で上昇した。抗アセチルコリン受容体抗体価の平均値は、術前 6.41 ± 6.21 (SD) nMから術後 2.62 ± 2.60 (SD)nMに有意に下降した ($P < 0.001$)。
4. 術後に抗アセチルコリン受容体抗体価を測定した41検体の術後経過期間は、1 カ月から 7 年 7 カ月の範囲にあった。術後の抗体価の変化率を、 $(\text{術後抗体価} - \text{術前抗体価}) \div \text{術前抗体価} \times 100 (\%)$ として表わした。術後抗体価の変化率は、+60%から-95%の間に分布した。術後抗体価の変化率は、術後 2 年未満ではバラツキが大きい、術後 2 年以上では、1 検体を除き 17 検体で下降していた。また術後抗体価の変化率と術後経過期間は、回帰直線 $y = -0.46x - 15.40$ 、相関係数 $r = -0.316$ ($n = 41$) であり、負の相関を示した。 ($P < 0.05$)。
5. 寛解 6 例の術後抗体価の変化率は、-58%から-94%の範囲に分布し、平均-75%で全例著明に下降していた。著明改善 15 例の術後抗体価の変化率の範囲は+60%から-95%、平均-28%、中等度改善 6 例のそれは+11%から-31%、平均-11%であった。寛解例の術後抗体価の変化率と、著明改善例の術後抗体価の変化率 ($P < 0.02$) ならびに中等度改善例の術後抗体価の変化率 ($P < 0.005$) との間に有意差があった。すなわち拡大胸腺摘出術の臨床効果が大きいものほど術後抗体価の下降も大きかった。

(総 括)

1. 全身型重症筋無力症患者の抗アセチルコリン受容体抗体の陽性率は 85%であった。
2. 拡大胸腺摘出術後の抗アセチルコリン受容体抗体価の平均値 2.62 ± 2.60 nMは、術前値 6.41 ± 6.21 nMに比し有意に低値であった ($P < 0.001$)。また術後抗体価の変化率は、術後経過期間とともに低下し、両者の間に負の相関を認めた ($P < 0.05$)。
3. 術後抗アセチルコリン受容体抗体価の平均変化率は、寛解 6 例では-75%であり、著明改善 15 例の-28% ($P < 0.02$) ならびに中等度改善 6 例の-11% ($P < 0.005$) との間に有意差を認めた。

論文の審査結果の要旨

本論文は、重症筋無力症に対する拡大胸腺摘出術により、血中抗アセチルコリン受容体抗体価が術後に有意に下降することを示し、またこの下降の程度と術後経過期間との間に有意の負の相関があることを明らかにしたものである。更に本論文は術後抗体価の下降の程度と術後の症状改善度との間に有意の関係のあることを明らかにしている。

本論文は、重症筋無力症に対する外科治療の意義を明らかにした価値あるものとする。